

ぼうさい通信 58号

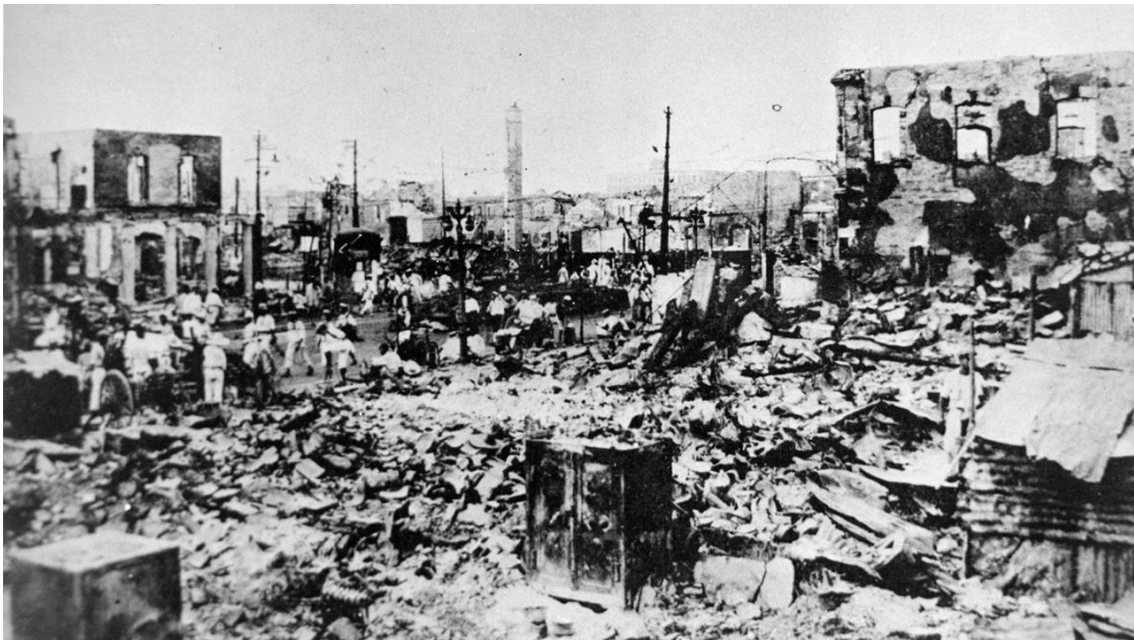


毎月16日は「防災教育啓発の日」

令和4年9月16日発行
熊本県立湧心館高等学校

ある日起こるかもしれない災害を想像してみましよう …そこにいるのが自分だったら……

1923（大正12）年9月11日。東京大学に保存されている地震計の針は振り切れ、10分間に及ぶ激しい揺れを記録しています。



1923（大正12）年9月1日午前11時58分、マグニチュード（M）7.9の巨大地震が関東地方を襲いました。世にいう「関東大震災」です。東京の南東の相模灘（さがみなだ）海底を震源として、関東地方の広い範囲に大きな被害をもたらしました。大地が生き物のように波打ち、ひび割れ、大人でも立ってられず、はいまわるほかすべがありませんでした。最新の研究では、その3分後にM7.2、その5分後にM7.3と巨大な揺れが3度発生した「三つ子地震」であったことがわかっています。その後も熊本地震（M7.3 震度7）と同規模の地震が3度続いています。

そのような中、その地域で生活を営む人々は何を見たのでしょうか？それは映像や写真、証言で知ることができます。近代都市となった東京を襲った初めての巨大地震の被害は甚大（じんたい）でした。死者10万人余り。中でも東京府（当時）での全半壊家屋は3万7千戸以上にのぼります。しかし、この震災の恐ろしさはその後の火災です。ちょうど昼時ということもあり、東京市（当時）の178か所から出火がありました。火は下町を中心に巨大な炎と化して町全体を焼き尽くして行き、3日間にわたって火災は続きました。四方八方から襲う火流を逃れるために人々は家財道具を担ぎ、荷車で引いて逃げまどいました。中でも陸軍の被服工場（墨田区）だった広大な空き地には4万人の避難民が殺到しました。安全な避難所に逃げ込んで安心した人々は、遅い

昼食を始める人もいたそうです。後から後から人や家財道具が押し寄せた空き地は、身動きができない状態になったそうです。やがて火の手が迫り、火の粉が舞い落ち始めるや否や、音を立てて無数の火の手が上がります。空き地内は大混乱に陥りますが、逃げようにも人や家財で動けない状態になります。午後4時ごろから3回にわたって火災旋風※が波状的に襲来しました。

※大火事の際起きる、炎を伴う旋風

そのうち烈風が起こる。はじめのうちはトタンや布団が舞い上がり、見る間に家財や人も巻き上げられた。荷物を積んだままの馬が空高く巻き上げられ、おひつ（炊いた米を入れる桶）くらいの大きさになり、木の葉のようにきりきり舞いして落ちてきた。
(14歳の小堰政男の回想『関東大震災体験記録集』)

阿鼻叫喚（あびきょうかん）の地獄のような混乱の中、空き地に避難していた人々の大半が命を落とします。その数は推定で約3万8000人。面積で言えば一坪（畳2枚分）あたり2人という割合で死者がでました。震災による死者の半数近くがここで命を落とし、助かったのは、深い水たまりにつかかって熱風を避けたり、人の山の下で気絶をしているうちに火が去ったなど、奇跡のような幸運に恵まれた2000人余りに過ぎませんでした。東京府内全域で約9万人の死者が出るという痛ましい悲劇となったこの震災でしたが、その死亡原因は8割強が焼死や窒息死によるものでした。



防災の日

ほぼ100年前の出来事ですが、このような惨劇（さんげき）を忘れないため、関東大震災が発生した9月1日は「防災の日」と定められました。本県では毎月16日を熊本地震を忘れないための「防災教育啓発の日」と定めています。誰でも自分の身に災厄（さいやく）が降りかかるとは考えたくありません。大切なことは「4つのプレートがぶつかり合う日本列島は世界で最も地震災害の多い国である」「マグニチュード6.0以上の大地震は世界の20%が日本で発生している」という事を常に心に留めておくことです。常に考えておくことが、命を救う行動につながります。

備え

科学の立場から地震予知の体制が整備されています。また、地震に強い国土づくり、家づくりがなされています。それをハード面の整備と考えれば、そこに住む人の備えはソフト面の整備といえます。関東大震災の経験から、「揺れが来たらまず火の元を消す。」という事も防災の常識となりました。

幕末の安政2（1854）年には関東大震災と同規模の地震が起きましたが、出火場所のはるかに少なく、死者も3895人と記録されています。安政大地震が深夜であった、という事もありますが、幕府が「地震、大火事の際、荷物を持って避難したものは厳罰に処す」と禁令を出していたため、関東大震災のような混雑が出なかったものと思われます。石油、ガスなど燃えやすいものが多い我々の生活とは直接比べられません。発災時には「火の元を消し、身軽な格好で安全な場所に避難する」という、ソフト面は常に記憶しなければなりません。



【文責 通信制防災担当】